

活動分野	森に親しむ講座		
タイトル	クリ林が支えた縄文の楽園～三内丸山遺跡の謎～		
実施日時	平成30年4月5日（木）10時～12時		
実施場所	千葉市文化センター		
受講者	39名	F I C会員他スタッフ	13名

### 活動の内容

1. 三内丸山遺跡は、青森市南西部に位置する日本最大級の縄文集落跡である。今から5,500年前から4,000年前までおよそ1,500年間、最盛期には500人近くの人びとが定住生活を継続していたと推定されている。1992年からの発掘調査で、広さ35ヘクタールの遺跡から質の高い多くの遺物が出土し、従来の縄文人の生活観を大きく変えた。
2. 集落の人びとの生活を支えた要因の一つに、落葉広葉樹林帯がクリの集約的利用に適していた風土があげられる。ブナやナラ林帯に火入れをすることで、二次的植物であるクリ林を容易に維持できた。三内丸山では、野生のなかで有用なクリノキを選び、植えて、クリ林を人工的に育成し収穫した。クリはカロリーの高い食糧で、集落の高い人口圧を支えた。
3. 技術の高さを誇る巨大な木造遺構が多く発掘されている。地面に穴を掘り6本のクリの柱を立てた大型掘立建物跡で、高さ14.7mの三層高床建物（祭祀施設）として復元され、この遺跡のシンボルとなっている。また、大型掘立住居は、最大のものが長さ32m、幅10m、床面積300㎡もあり、集会所、共同作業所、催事場などの他目的施設と考えられている。いずれも長さの単位縄文尺の規格を用いており、高度な建築技術を有する指導者がいたと思われる。
4. 遺跡から多量の円筒土器や板状土偶が出土しており、三内丸山が生産地であった可能性が高い。土器の発明により煮炊き、灰汁抜き、貯蔵が容易になり、食生活の向上が図られた。板状土偶はすべて女性を表しており、子孫の繁栄、資源の豊穡を願う際の祈りの対象として使われた。
5. 縄文女性はおしゃれであった。首飾り、腕輪、耳輪など装身具が多数発見されている。注目すべきことは、美への欲求を満たすために、ヒスイ（糸魚川）やコハク（久慈）など遠方から集められた材料が使われていることである。ヒノキ科針葉樹の樹皮を素材に、網代編でつくられた小さな袋（縄文ポシェット）がほぼ完全な形で出土していたことは興味深い。
6. 三内丸山は採集社会で、植物の採集、栽培、貝拾いなど食糧の確保は女性の仕事であった。煮炊き、加工をたやすくした土器の発達によって、植物性食料の利用が多くなり、女性の仕事の重要性が増して、その地位が相対的に高くなった。土偶は女性を表現し、装飾品の大部分は女性のものであった。縄文社会は女性優位社会であり、だからこそ、安定的で、平和な社会が長続きしたといえる。



大型掘立建物・大型堅穴住居



縄文ポシェット  
(当会員・井形啓巳氏復元)